講演会報告

日韓学術講演会「佐渡金山と朝鮮人戦時労働者」

歴史認識問題研究会は2022年7月9日と7月10日に、東京と新潟で日韓学術講演会「佐渡金山と朝鮮人戦時労働者」を開催しました。両日とも快晴に恵まれましたが、日差しの強い暑い日でした。7月8日の安倍晋三元首相銃撃事件の混乱や動揺が収まっていない時期でしたが、多くの方々が来場してくださいました。この場をお借りして、心より御礼申し上げます。また、安倍晋三元首相のご冥福をお祈り申し上げます。

今回の講演会では、韓国より『反日種族主義』（2019年）の共著者である李宇衍博士をお招きして、佐渡金山と朝鮮人労働者のお話をしていただきました。「佐渡鉱山　朝鮮人の労働と日常」というタイトルで、PowerPointを駆使したデータ分析による李博士の講演は、経済学に基づいた学術的な歴史考察でした。

写真：李宇衍博士の講演（東京）

李博士は冒頭で朝鮮人の強制連行と強制労働は神話である、と断言しました。戦争時、日本は朝鮮と比べて仕事も多く、賃金も高かったので朝鮮人の多くが日本行きに憧れていた、と説明しました。李博士は、1939年から1945年の朝鮮人の戦時動員は強制連行ではなく、移民と同質であったと考察しています。

多くの朝鮮人が短期で日本へ働きに行き、大金を手に入れることができた。自身の借金を返済して土地を購入した者もおり、当時の朝鮮人にとって戦時動員とは主体的で積極的な成功であった。経済的な視点で見ると、成功した海外移民と言える。特殊な点は平時ではなく戦時であったことと、独立国ではなく植民地状態であった国であったという２点である、と李博士は考察しています。

強制連行を主張する人々が一定数存在しますが、李博士は当時の朝鮮半島で朝鮮人を強制的に動員することはできなかったと言います。理由は田舎の役人と警察のほとんどは朝鮮人であり、動員の際は本人の自発的意思が大切であり、断っても処罰できなかったからです。1944年の徴用で初めて法的な処罰が適用されましたが、徴用命令書作成から対象者の集合までの手続きは煩雑で、２週間ほど時間がかかりました。徴用も奴隷狩りのような強制連行とは言えませんでした。

一部では強制連行と主張している人々が存在しますが、これには理由があると李博士は言います。1950年からの朝鮮戦争で、韓国では街頭徴用が行われました。店や畑で働いている青年を、軍が連れ出して動員することができたのです。夜中に民家に入って、寝ている青年を連れ出したこともあります。学校前で待ち構えて、学生たちをトラックに載せて学徒兵としたこともあり、その総数は30万人とも言われています。そのような記憶が植民地時代の記憶と混ざって混乱してしまった、と李博士は考えています。

1939年から1945年にかけて日本へ来た朝鮮人は、徴用も含めて240万人に上ります。その中には２回以上日本に来た人も存在し、この点を考慮しても戦時移民という表現が適切だ、と李博士は主張しました。

強制労働（奴隷労働）を主張する人々は、死亡率が日本人より高かったことを挙げますが、この理由は朝鮮人の作業経験が足りなかったからであり、奴隷のような労働をさせられていたからではない、と李博士は考察します。そしてそれは日本人より賃金が少なかった理由でもあります。

李博士は日本国内の60か所の炭鉱の日本人と朝鮮人の賃金を比較し、35か所の炭鉱は日本人の賃金が朝鮮人より10～20％高かったが、残りの25か所炭鉱では朝鮮人の賃金の方が日本人より高ったことを確認しています。当時賃金は出来高制であり、成果によって賃金が決定していました。つまり、朝鮮人は勤続年数が少ないことによる技術不足のため賃金が少なかったのです。しかし、逆に言えば、技術さえあれば日本人よりも稼ぐことができました。民族差別による不当な低賃金ではなかったのです。

賃金に関しては、当時のデータが残っているので比較が可能です。佐渡金山の1940年の平均賃金は66円77銭、1943年の平均賃金は82円44銭でした。同じ金山である北海道の住友鴻之舞金山は1937年の平均賃金は60円20銭、1943年の平均賃金は79円77銭であり、ほぼ同じ水準となっています。

李博士の賃金比較はさらに続きます。1940年のソウル紡績（綿加工）男工のひと月の給与は14円、同年のソウル男性銀行員は30円80銭でした。また、1943年の東京の公立小学校教員の初任給が55円、1944年の日本人巡査の初任給は45円でした。これらのデータを見れば、佐渡金山の朝鮮人労働者の賃金の高さが分かります。

日本の会社が朝鮮人から諸経費と称して賃金を巻き上げ、残りの金額も強制貯金させられて、彼らの手元に残る賃金は少なかったと強制連行・強制労働を唱える人々は主張します。しかし、佐渡鉱山の賃金の内訳を見てみると、食事代や強制貯金などを含めても約40円手元に残っていたことが判明しました。そのお金で食べものを買って食べたり飲んで、博打や送金をすることもできました。これは賃金が手元に残っていなければできなかったことだ、と李博士は反論します。

強制貯蓄は朝鮮人だけでなく日本人にも適用された国家的施策であり、長崎では日本

人の強制貯金の金額が朝鮮人の1,5倍であったことが、李博士によって明らかになっています。朝鮮人労働者の賃金が不当に減らされたということは言えない、というのが李博士の主張です。

一次史料では佐渡鉱山に1519人の朝鮮人が動員された、と書かれています。このうち徴用は300～500名と李博士は推察します。これは４分の３の朝鮮人が自分の意志で佐渡に渡ったことを表しています。終戦後直ぐに朝鮮半島に帰った朝鮮人労働者の未払いの賃金、保険金などがあったことは事実です。1140名の供託金の資料が残っており、一人202円の供託金がありました。李博士は1945年の佐渡金山の賃金は一人100円くらいと推察しています。したがって、一人の供託金は約２か月分です。これは裏を返せば、終戦直前以外の全ての時期には、正常に賃金が支払われていたことの証明になります。

また、危険できつい仕事を朝鮮人だけにさせたという主張は、事実と異なることも李博士は指摘しました。炭鉱の仕事は誰でもできるわけではなく、熟練者が必要になります。そうしなければ事故が起こるからです。事故が起こる危険性を減らすために、朝鮮人は日本人熟練者と一緒に仕事をしていました。徴兵によって日本人の若い男たちが減ってしまい、力のない日本人（女性、子供、老人）が残りました。日本へ渡った朝鮮人の多くは20代から30代の男性であったので、力仕事が必要な坑内に配置されたというだけで、民族差別とは言えません。また、他の鉱山の事故率と比較しても同じくらいで、佐渡鉱山が突出して事故数が多いとも言えない、と李博士は解説しました。

李博士の独自考察の中に、日本へ渡った朝鮮人の生活レベルを図るための栄養状態調査があります。それによりますと、朝鮮半島南部にいた朝鮮人の平均摂取カロリーは戦時中1300～1700カロリーだったとのことです。日本では配給量でカロリーを計算した結果、日本での摂取カロリーは戦争末期の1945年でも、朝鮮半島南部の人々よりも1,8倍のカロリーを取っていたことが判明した、と李博士は説明します。

佐渡鉱山では朝鮮人の逃走者が出ていますが、逃走は日本国内での職場変更のためで、日本全国で約4割の朝鮮人が逃走しました。強制連行されたなら朝鮮半島へ帰る筈ですが、彼らは日本国内でより好待遇の別の職場へ移ったのです。逃走防止の為に、佐渡鉱山は朝鮮人労働者の家族受け入れに力を入れたことを李博士は説明しました。その結果、家族と過ごす朝鮮人は1940年時点で７％でしたが、1943年には20％に増えます。このため、佐渡鉱山の逃走率は約14％となり、他の鉱山よりも逃亡者が少なかった、と李博士は佐渡鉱山の良好な管理を指摘します。

李博士は韓国では今でも給料から食事代を引くということは一般的ではなく、慣れていないと話しました。このことから、給料から食事代を引かれることに不満を持った朝鮮人たちが、佐渡鉱業所に対して争議を起こしたと言います。実際に『特高月報』に記録が残っていますが、二日で解決し、佐渡鉱山は他の鉱山と比べても平和な職場であった、と李博士は考察しています。

李博士は、佐渡鉱山は賃金も高くて逃亡者も争議も少ない平和的な職場だった、と結論づけています。1939年から1945年に起きた朝鮮半島から日本への移動は、朝鮮人の短期的な海外移民だった。戦時労務動員の経験は、戦後の韓国の産業化に役立つ側面があった。奴隷の歴史ではない。これが李宇衍博士の歴史考察です。

日本から見れば、動員された人々と見えるかもしれませんが、朝鮮人から見ると異なっ

てきます。戦争という機会を活用した、移民成功の歴史です。朝鮮人が勝利した歴史ともいえるので、佐渡金山が世界遺産登録されることは、朝鮮人の勝利としても祝うことができる、と李博士は最後を締め括りました。

写真：西岡力本研究会会長の講演（東京）

西岡力本研究会会長は講演の冒頭で、日本の朝鮮人戦時動員政策は失敗であったと述べました。これは、強制連行と強制労働はなかったという結論は同じですが、日本と韓国から見ると表現が違う、という面白いことが起こっています。この点は最後に説明します。

まず、歴史的事実として、1939年以前は朝鮮半島から朝鮮人が日本に渡航することを制限していました。日本人賃金の低下、文化摩擦、治安の乱れを日本政府が懸念していたためです。西岡会長はその証拠として、1934年の閣議決定では朝鮮人の日本渡航を制限したことを挙げます。戦時動員以前から朝鮮人は日本へ行きたかったのです。日本の朝鮮統治で朝鮮人の人口が急増し、賃金の高かった日本へ職を求めたからです。そのために、統計が存在する1930年から42年までに、約４万人が日本へ不正渡航したことが史料で分かっており、３万３千５百人を朝鮮へ送り返していることを西岡会長は紹介しました。戦時動員時期の1939年から1942年までに２万２千８百人の不正渡航者を発見し、１万９千250人を朝鮮へ送還しています。西岡会長は、日本が本当に強制連行をしたのなら、この送還者を働かせただろう。しかしそれをしなかった。1939年の戦時動員は、1934年閣議決定の例外として始まったことである、と強調しました。

しかし、日本渡航の制限を少し緩和しただけで、雪崩のような日本渡航が始まってしまった、と西岡会長は指摘します。戦時動員に関しては朝鮮総督府の統計、厚生省の統計、内務省の統計、戦後の大蔵省の統計、1959年の日本の入管白書がありますが、それぞれ数値が異なっています。一番多いのは総督府であり、これは釜山の港を出発した朝鮮人の人数を記している（朝鮮内の各郡に集合した人数の可能性もある）からです。厚生省は日本の職場に着いた朝鮮人の人数を確認してから、内務省は治安関連で渡航後しばらく間をおいてから人数を調査して記載した、と西岡会長は考えています。

人数が異なっている原因は、釜山から船に乗って日本に着いて、日本の職場に到着す

るまでに逃亡者がいたからです。これは佐渡金山でも同じ現象がみられています。西岡会長は、渡航前から朝鮮人労働者はブローカーと結託しており、日本企業が煩雑な手続きを代行してくれる上に、無料で日本まで送ってくれることを悪用していた朝鮮人が大勢いたことを指摘します。釜山に着くまでに韓国内でいなくなる者、日本に着いてからいなくなる者が史料で判明しています。

1939年から1945年に日本に渡航した朝鮮人の総数は、内務省統計の240万人という数字のみが存在します。同じ内務省統計で戦時動員者数は約60万人です。しかし、同じ時期の日本に渡航した朝鮮人の総数は約240万人となっています。西岡会長はこの統計を見て、25％だけが戦時動員で残りの75％は自分の意志で日本に来た自発渡航者（個別渡航者）であったことを発見しました。特に1939年から1941年の募集時期では自発渡航者が9割（94万人）であり、戦時動員は1割（13万人）でした。1942年から1945年の官斡旋、徴用の時期では自発渡航者は6割（83万人）で、戦時動員は4割（48万人）です。李博士は、この自発渡航者を戦時移民と呼んでいるのです。

森田芳夫『数字が語る韓国・朝鮮人の歴史』（1996年）所収の厚生省統計によると、1945年3月末時点の朝鮮人戦時動員者は、日本の職場にいる者が28万8488名であったが、逃亡者は22万2225名、労働契約期間が満了して朝鮮へ帰還した者は５万2108名、職場で問題を起こして反省の色がなかったため、強制的に朝鮮へ帰ってもらった不良送還者は１万5801名、その他が8904名だったことも明らかになっています。

約60万人の戦時動員朝鮮人のうち、約４割が日本国内で逃亡していたのです。李博士が説明した４割の逃亡者の根拠はここにあります。また、李博士は自身の講演の際に三菱鯰田炭鉱の事例を紹介しており、そこでは朝鮮人の85％が勤続年数が1年以下だったそうです。

1939年の戦時動員以前から、朝鮮半島では日本へ行きたいという強力なモチベーションがあったが、日本政府はそれを塞いでいた。しかし、戦時下になって日本人男性の労働力が徴兵でとられてしまい、肉体労働者が必要となった。この問題を解消するために戦時動員を始めて、戦争に必要な炭鉱などの職場に朝鮮人を送ろうと計画したが、それ以外の工事現場や工場などに３倍以上の朝鮮人が来てしまった。これが西岡先生の歴史考察です。炭鉱以外の工場に行った朝鮮人を李博士は短期移民と捉え、韓国人の勝利であったと表現していますが、西岡会長は日本の政策の失敗であったと表現しています。

炭鉱など戦争遂行に必要な事業所で働いてもらうために戦時動員したにもかかわらず、実際は25％しか統制できていなかったので、これは政策の失敗と言っても良いと西岡会長は考えています。生じた現象を日本側と韓国側で見たとき、捉え方は異なりますが、言っている内容は同じなのです。つまり、強制連行や強制労働といった主張は間違いだ、ということです。統計的に見れば、それは明らかであると思います。

それでもなお強制連行と強制労働を主張するのであれば、証拠を出さなくてはならない、と西岡会長は主張します。一部の違法性が疑われる戦時動員の事例のみで、歴史全体を語ることは学術的ではありませんし、歴史の事実から目をそらしていると思います。

その後、西岡会長は平井栄一編『佐渡鉱山史　其ノ二』の解説を行いましたが、同様の内容が『歴史認識問題研究』第10号の「佐渡金山が朝鮮人強制労働の現場ではなかったことを示す一次史料　平井栄一編『佐渡鉱山史其ノ二』より（抜粋）」に記載されていますの

で、ここでは省略いたします。

朝鮮人の強制連行と強制労働に反論するのは、日本人だけではありません。韓国でも学術的な考察から、強制連行と強制労働を批判する人々が増えています。証言者が強制性があったことを話しているから真実だと考えるのではなく、綿密な裏付けをとり判断しなければなりません。歴史認識問題研究会は佐渡の現地視察によって、韓国人の証言が信憑性に欠けることを証明しました。その点は、本誌掲載の「歴史認識問題研究会佐渡視察報告」をご一読いただけましたら幸いです。

写真：会場からの質問に答える李宇衍博士（写真中央）、
通訳の崔碩栄先生（写真右）と西岡力会長（写真左）